

阿弥陀如来立像 (市指定文化財)

本證寺の本尊で、低い肉髻から鎌倉時代後期の作と推定されます。腹部から膝は十分な厚みがある一方、胸部から上が華奢なのが特徴です。

本尊を安置する宮殿は、宝暦11年(1761)に門徒である水口藩加藤家から寄進されました。



(阿弥陀如来立像・宮殿)

慶円上人坐像 (県指定文化財)

本證寺を開いた慶円の木像です。胎内銘から、貞和3年(1347)に「きやうけい」という慶派の仏師により作られたとわかりました。合掌する姿は、真宗では古い肖像彫刻にみられる特徴です。



(慶円上人坐像)

聖徳太子立像 (市指定文化財)

聖徳太子16歳の姿を表していると考えられます。的確な表現から、鎌倉時代末期の力量のある仏師の作と考えられます。

真宗では、聖徳太子を観音の生まれ変りとするとともに、日本に仏教を広めた恩人として信仰してきました。



(聖徳太子立像)

本堂 (県指定文化財)

本證寺は、永禄6年(1563)の三河一向一揆の後、いったん破却されたと伝えられます。約20年後に一揆の罪を許され、100年後の寛文3年(1663)には現在の本堂が再建されました。入母屋造・本瓦葺の建物で、地方の真宗寺院本堂としては比較的大型になります。内陣の後門柱(来迎柱)のみ円柱とし、他は全て角柱が用いられています。また、広縁と矢来内の正面を除いて1間ごとに柱が立つ、古い本堂建築の様式を留めています。

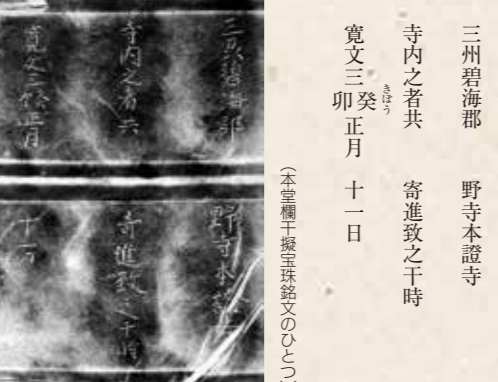
内部に見られる内陣・余間正面の柱上部の組み物、彫刻欄間や巻障子などは、宝暦年間(1751～63)に改修を受けた際に加えられたものと考えられています。欄干の擬宝珠には、寄進者の銘が刻まれています。



(本堂)



正面に阿弥陀如来立像、右に慶円上人坐像、左に聖徳太子立像があります。(本堂内部)



(本堂欄干擬宝珠銘文のひとつ)

三州碧海郡 野寺本證寺
寺内之者共 寄進致之干時
寛文三癸卯正月 十一日

庫裏

庫裏は、寺の賓客をもてなす客殿、台所、住職の住まいなどの機能を持つ建物で、文政13年(1830)に再建されました。

入口を入ると、広大な表土間と広間が広がります。天井では太い梁組を見せるなど、本證寺の格式を象徴しています。



(庫裏)

本證寺のイブキ (県指定天然記念物)

この樹は、樹高約23m、胸高囲340cm、枝張りは東西8.5mと南北9mで、樹齢は800年と推定されています。

また、親鸞聖人にまつわる伝説が伝えられています(「本證寺の伝説」参照)。



(本證寺のイブキ)

国指定史跡 本證寺境内の見どころ



経蔵 (市指定文化財)

経蔵は寺宝の經典を収納する蔵で、文政6年(1823)に建立されました。腰壁は、四角い平瓦を貼り付けて、漆喰をかまぼこ状に盛り上げて目地をふさぐ海鼠壁となっています。この工法は耐火性に優れ、土蔵などに見られます。

内部には、輪蔵(回転式書架)ではなく、経檀(書棚)を備えています。



(経蔵)

鐘楼 (市指定文化財)

鐘楼は元禄16年(1703)に建立されました。牛久保(現豊川市)の堂宮大工岡田五左衛門が建築に関わっています。

丸柱の主柱に脇柱を持つ形式は、各宗の本山など大寺院に用いられるもので、当時の本證寺の寺格がわかります。また、頭貫端部の彫刻木鼻や、髯股の龍、獅子、麒麟、虎などの彫刻も秀逸です。



(鐘楼)

裏門 (市指定文化財)

裏門は薬医門という形式で、庫裏東側に1700年代前半に建立されました。薬医門とは、2本の本柱の背後だけに控え柱を立て、切妻屋根をかけた門のことで、名称は医家の門として用いられていたことに由来するといわれています。

簡素ですが姿が雄偉で力強く、風格が備わっています。



(裏門)

鼓楼 (市指定文化財)

鼓楼は、宝暦10年(1760)の建築です。真宗寺院特有の建築で、大鼓を打って時を知らせるとともに、物見櫓としての機能も有していたとされます。

上層の柱は内側に傾けられ(内転び)、目の錯覚を利用して、より高く安定しているように見せています。石積みの基礎上に建つ姿は、城郭の隅櫓を思わせます。内部には、中央の柱間に大梁を渡して大鼓が吊られています。

本證寺のハス

本證寺の内堀に咲くハスの起源はよくわかりません。明治32年(1899)の「三河三ヶ寺野寺本證寺全図」に見られることから、少なくともこの頃には本證寺の景観の一部と認識されていたようです。

毎年、初夏には山門に向かって右側には白い花を、左側には赤い花を咲かせていました。ところが、平成6年(1994)を最後に、突如消滅してしまいました。

平成22年(2010)になり、ハスのある本證寺の景観を取り戻そうと、地元有志が「本證寺ハスの会」を結成します。会では、内堀で繁殖したミシシビアカミミガメ(ミドリガメ)など外来生物の駆除を進めました。その結果、平成25年(2013)には、山門両側のハスの再生に成功したのです。そして、会の活動は、現在でも続けられています。



内堀にハスが描かれています。(三河三ヶ寺野寺本證寺全図・部分)



(ハスと鼓楼)



(現存する堀と土塁)

本證寺の堀と土塁

本證寺は、内堀と外堀という二重の堀に囲まれています。内堀は、本堂を中心に囲むものと、庫裏を囲むものの2つがあり、その外側に東西約320m、南北約310mにおよぶ外堀がありました。

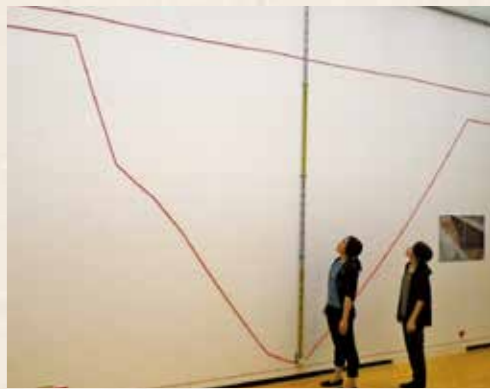
外堀は、三河一向一揆前の16世紀前葉から中葉(戦国時代)に掘られ、その後、短期間で埋まっています。堀の幅は約4.7m、深さ約3mで、傾斜が急なV字形断面をしています。

その後、18世紀後葉から19世紀前葉(江戸時代)に、戦国時代と同じ位置に、傾斜が緩やかで幅広な浅い外堀が掘られました。

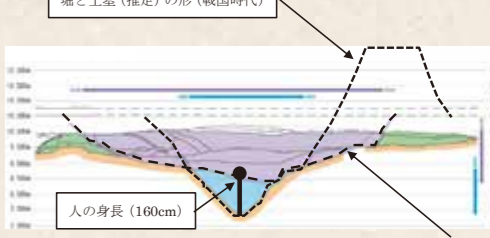
また、堀の内側に残る土塁は、基礎部分の幅が約7mあります。堀の底から土塁の上までの高低差は、少なくとも5.4m以上ありました。



(本證寺外堀発掘調査G区)



(復元外堀断面を見上げる)



本證寺外堀発掘調査B区(東側から見たところ) 堀の形(江戸時代)

本證寺の伝説

1. 龍宮淵

幡豆郡小島村(現西尾市小島町)を訪れた慶円(その時は性空と名のり)は、村民が大蛇に苦しめられているのを知り、大蛇が現れる龍宮淵に向いました。すると老人が現れ、「坊主の身で刀を帯びるのはなぜか」と問ってきます。慶円が「例え殺生の破戒をしても、危害を与える大蛇を退治するのは僧の務めである」と答えると、老人は大蛇に変じて、淵の底に消えていったとされます。



(水野椋山画)

2. 龍燈松

慶円が済度(迷いや苦しみから救うこと)した大蛇は、龍宮に戻り龍となり、野寺にお堂を建ててからも慶円の元に現れました。龍は、龍宮と地下でつながる境内の龍宮池から地上に出て、池を覆うような松の木を伝えて本堂に向い、法燈を灯したと伝えられます。慶円は、この松に燈火を献じて「龍燈松」と呼びました。



(三河三ヶ寺野寺本證寺全図・部分)

3. 柳堂説法・雨漏り御殿・イブキの木

浄土真宗を開いた親鸞が、矢作の柳堂(現岡崎市大和町の妙源寺)に逗留して説法をしました。この時、慶円も参加し、親鸞を野寺へ案内したといわれます。親鸞が留まった部屋は大変な雨漏りがしたのですが、親鸞の周囲だけは不思議と水滴が落ちてきませんでした。その際、親鸞は本尊前の花瓶に生けられたイブキの枝を庭の地面に挿したところ、やがて根を張り、現在の大木(天然記念物 本證寺のイブキ)へと成長していきました。

4. 龍椀(貸し椀)

寺での法要などで膳椀が必要な際、境内の龍宮池に数量を記した紙片を投ずると、龍宮に住む龍がこれを用意し、翌朝にはその数の膳椀が浮き上がってきたといわれます。ある時、一組の椀(「龍椀」・垣葛文組椀:愛知県指定文化財)を返し忘れると、以後、二度と膳椀が浮かび上がることはありませんでした。



(垣葛文組椀)

「おきょうえんさん」

慶円の命日にあたる旧暦1月13日(現在は2月の第2日曜日)に、「おきょうえんさん」と呼ばれる法会が開かれます。これは、本證寺の門徒(檀家)であるなしに関係なく、外堀に囲まれた「寺内」の人々(現在では野寺町のみなさん)が運営しています。最後に、独特な形をしている「イナイモチ」が参詣者に配られます。



(「おきょうえんさん」の法要)



(イナイモチ)

本図の位置



公共交通機関のご案内

名鉄西尾線
・南桜井駅から 徒歩15分・あんくるバス4分

桜井駅から 徒歩30分・あんくるバス14分
(桜井公民館に無料レンタサイクルがあります)

桜井公民館 0566-99-3319
*あんくるバス(コミュニティバス)は、1乗車100円です。

安祥文化のさと
安城市歴史博物館
安城市埋蔵文化財センター

歴史の散歩道
三河一向一揆の舞台
本證寺を歩く

※寺は神聖な場所です。見学の際には、マナーを守るようにお願いします。

安城市歴史博物館・安城市埋蔵文化財センター



〒446-0026 愛知県安城市安城町城堀30番地
歴史博物館 TEL 0566-77-6655 FAX 0566-77-6600
埋蔵文化財センター TEL 0566-77-4490 FAX 0566-77-6600
URL <http://www.city.anjo.aichi.jp>

利用のご案内

- 開館時間 AM9:00~PM5:00 (入館時間PM4:30まで)
- 休館日 毎週月曜日(祝日の場合は開館) 年末・年始(12/28~1/4)

歴史博物館観覧料

- 【常設展】一般：200円
- 【特別展】一般：400円程度
- ◎常設展も観覧可。
- ※中学生以下は無料
- ※団体(20人以上)、障害者は割引有り。

2023.3 10,000(S) 環境に優しい植物油インキを使用しています。

安城

歴史の散歩道

三河一向一揆の舞台 本證寺を歩く



安城市教育委員会

本證寺の歴史

本證寺は浄土真宗(真宗大谷派)の寺院で、山号を雲龍山といいます。鎌倉時代後期(13世紀末ころ)に、慶円によって開かれました。寺伝によれば、慶円が新たな布教の土地を求めて矢を放ち、この地に着地したとされます。

15世紀後半には、本願寺の蓮如の教化によって浄土真宗の高田門徒から本願寺門徒(いわゆる一向宗)に転じました。このころから、三河地方の本願寺門徒における寺院の組織化が進み、後に上宮寺、勝鬘寺(いずれも岡崎市)とともに三河三か寺とされます。そして16世紀の前半になると、二重の堀と土塁が築かれ、城郭寺院とも呼ばれています。

永禄6年(1563)には、寺の不入権(租税免除と治外法権)侵害が発端となって、三河一向一揆が勃発します。本證寺は他の三河三か寺とともに領主の徳川家康と争いました。翌年、いったんは和議が結ばれますが、家康から一方的に出された改宗命令を拒否したため、坊主衆は領国から追放となり、建物も破却されたと伝えられます。本證寺10代の空誓も、賀茂郡菅田和(現豊田市)に逃れました。そして約20年の後、家康の伯母石川妙春尼の尽力もあって、一揆の罪は赦免されます。天正13年(1585)の徳川家康黒印状では、本證寺は施設である「道場屋敷」の保証と、寺に属した「家来三十間」(家来=外堀に囲まれた「寺内」の住人)の租税免除が認められています。

江戸時代になると、三河三か寺は、本山一中本山一末寺という本末制度のなかで中本山の地位を与えられ、末寺のとりまとめ役を担いました。また、本證寺は領主や寺社奉行と配下の寺院とをつなぐ三河国の触頭としての役割をあわせ持ち、幕末には200か寺余の末寺を有する大寺となりました。

今日の本證寺の寺観は、江戸時代を通じて順次整えられています。現存する建造物のうち最も古く再建されたのは本堂で、以後、鐘楼、裏門、鼓楼、経蔵、庫裏の順となります。「寺内」には金龍寺、照護寺、宗玄寺、善證寺の4つの寺中(角寺)と、家老石川家、代官神谷家、侍水野家の屋敷もありました。そして、江戸時代後期には、かつての外堀の位置が掘削され、再整備が行われました。

また、大名家と関係を持っていたことも特徴です。近江国水口藩(現滋賀県甲賀市)の加藤家は、本證寺の門徒であったことから、宝暦11年(1761)に藩主の加藤明熙が本尊を納める宮殿を寄進しています。

明治時代になると、本末制度は廃止されますが、今日まで多くの寺宝を伝え、堀や土塁、建造物群が残されています。

平成27年(2015)3月10日に、国の史跡に指定されました。

聖徳太子絵伝 (国指定重要文化財)

日本仏教の恩人である聖徳太子の生涯を、全10幅、121場面にわたって描いています。聖徳太子七百年忌であった鎌倉時代の元亨元年(1321)ころの作とされ、鎌倉・室町時代の現存する太子絵伝としては最大の規模です。

太子の1年に対し、必ず1場面以上が振り分けられ、下から上へ場面が配置されています。



(聖徳太子絵伝第六幅) 右下は、聖徳太子22歳のとき、推古天皇の摂政に任ぜられているところ。その上では、「物部氏との戦いに勝利したら、全ての人々を救済する寺院を建立します」と太子が誓願されたのを受けて、西天王寺がつくられた場面です。

善光寺如来絵伝 (国指定重要文化財)

善光寺(長野市)の本尊・阿彌陀三尊像が、天竺(インド)でつくられ、百濟(朝鮮)を経て、善光寺に安置されるまでの由緒を、全4幅、36場面にわたって描いています。鎌倉時代に東国で盛んになる善光寺信仰が、真宗とともに三河へもたらされたと考えられます。



(善光寺如来絵伝第二幅) 最下段は、阿彌陀三尊像を日本へ送り出す、百濟の海岸での場面です。その上は龍宮城で、この金を使って阿彌陀三尊像がつくられました。これら二つの海を合成して描いている場面は、この絵伝のみどころのひとつです。